



落合橋から見る旧豊平川。流れが止まり、両岸に草が茂り、かつて急流だったとは思えないほど穏やかだ

重要な豊平川の渡し場

この渡し場は、旧豊平川と旧厚別川の合流地点で、落合^{おちあい}という所にあった。落合という名は、川が落ち合うところからきている。

白石村開基七十年記念白石村史(昭和15年9月10日発行)には「白石村字米里に札幌村に通ずる渡船場一箇所あり、豊平川を渡るものなりとす」と記している。北海道文書館の北海道官設渡船場資料(三)の豊平川の項には、白石村字米里に北海道庁が大正6年10月5日に設置の告示をしたことが記されている。

当時の米里^{よねさと}地区は、白石村史(大正10年4月10日発行)に「米里地区は松田開墾地入口より落合までとす」と、米里の地域を示している。松田開墾地は大正5年版の5万分の1地形図に「松田農場」と記載があり、函館本線北側から望月寒川と逆川と小川に囲まれた範囲を指している。

白石村字米里^{あざ}は、明治23年(1890)の一ノ戸多三郎、本庄春蔵ら9戸の移住開拓に始まる。

米里開拓の先駆者である本庄春蔵は、明治25年に水田約3反歩(約3,000平方メートル)、一ノ戸多三郎は5畝歩(約500平方メートル)を試作した。明治27年には逆川に米里水門を設けて用水路とした。

米里の名は明治26年に本庄春蔵と藤森徳太が「米が豊かに実る里」の願いを込めて役場に届け出て命名した。

この地域は現在の東米里地区で、低湿地帯であるため、たびたび洪水に見舞われ、離農が相次ぎ、長い間放置されていた。再度入植を試みたのが大正3年(1914)頃からで、河川の整備にも着手されてきた。

学校は船で対岸の対雁へ

昭和17年(1942)頃に木造の落合橋が架けられたため、伴の渡しは廃止された。伴の渡しという名称は、近くで農業を営んでいた伴さんが農業のかたわら船頭を務めていたのでそう呼ばれた。

当時の渡し賃は、近くで生まれ育った古老の話では「子供3銭、自転車を含めると5銭で、馬と馬車は20銭だった」とのことだ。

東米里では白石の中心部に出る機会よりも、伴の渡しで川を渡って雁来に出て苗穂に行くことが多かった。白石側よりもはるかにりっぱな幹線道路が札幌から江別へ続いていたからだ。札幌から江別を経て幌内炭鉱へ至る道路で、明治13年頃にはできていた道路だ。落合橋ができてからも同じように東米里の人はこの道を使った。

一面が平原のため、冬は札幌の街と全く違った吹雪き方をした。激しい地

伴の渡しで豊平川を渡り 買い物も学校も対岸の村へ





渡しに使った船の記録はないが、この写真の船と同じようなものと思われる（明治4年伏古村）

吹雪が吹き荒れ、一寸先も見えず、吹き溜まり、道路を探すのに苦労した。そのようなときは馬と一緒にいると安全で、馬は確実に家に導いてくれた。

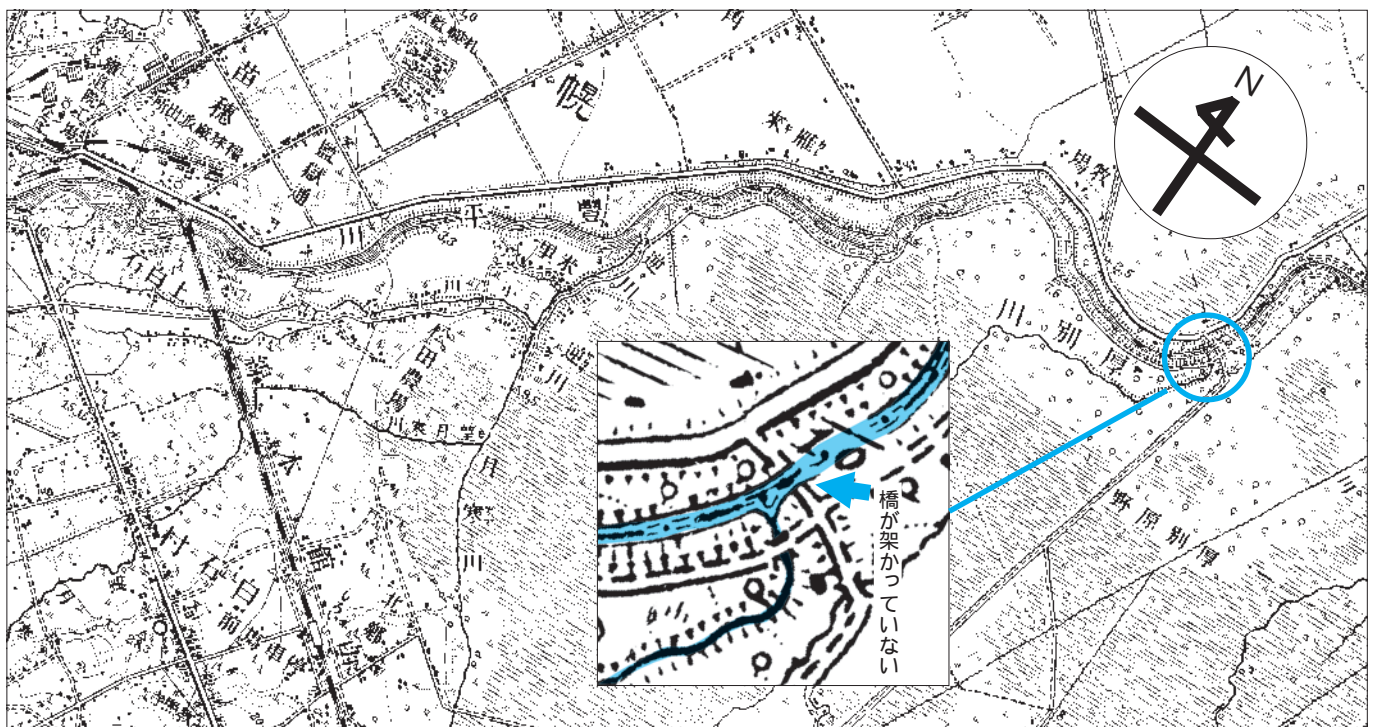
小学生は豊平川の対岸の江別の対雁分校に渡し船で渡って通学した。渡しでの人身事故はなかったが、個人の船では何度かの事故があったという。

東米里は農地開拓営団の事業で開拓が進められたり、戦時中に緊急開拓者の入植もあって人口が増え、昭和24年(1949)12月26日に東米里小学校が誕生した。

伴の渡し場があった地区や東京の板橋区から入植した板橋地区は札幌市の緑のグリーンベルト構想の地域に指定

された。ゴミで埋め立てられた後、大規模な公園に生まれ変わる予定で、一部公園造成が始まっている。豊平川は雁来橋付近でショートカットされて石狩川へ注ぎ、伴の渡しがあった部分は水の動きのない旧河川となり、静かなたずまいをみせている。

（南部 享）



大正5年の5万分の1地形図と伴の渡しの部分拡大